

Botchan Chapter 5 (Natsume Sōseki)

君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味の悪るいように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか分りゃしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じゃないか。物理学校でさえおれくらいな声が出るのに、文学士がこれじゃ見つともない。

おれはそうすなあと少し進まない返事をしたら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮒を三匹釣った事がある。それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思ったら、ぽちやりと落としってしまったがこれは今考えても惜しいと云ったら、赤シャツは顔を前の方へ突き出してホホホと笑った。何もそう気取って笑わなくっても、よさそうな者だ。「それじゃ、まだ釣りの味は分らんですな。お望みならちと伝授しましょう」とすこぶる得意である。だれがご伝授をうけるものか。一体釣や猟をする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくって、殺生をして喜ぶ訳がない。魚だって、鳥だって殺されるより生きてる方が楽に極まってる。釣や猟をしなくっちゃ活計がたたないなら格別だが、何不足なく暮している上に、生き物を殺さなくっちゃ寝られないなんて贅沢な話だ。こう思ったが向うは文学士だけに口が達者だから、議論じゃ叶わないと思って、だまっていた。すると先生このおれを降参させたと疍違いで、早速伝授しましょう。おひまなら、今日どうです、いっしょに行っちゃ。吉川君と二人ぎりじゃ、淋しいから、来たまえとしきりに勧める。吉川君というのは画学の教師で例の野だいこの事だ。この野だは、どういう了見だか、赤シャツのうちへ朝夕出入して、どこへでも随行して行く。まるで同輩じゃない。主従みたようだ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極っているんだから、今さら驚ろきもしないが、二人で行けば済むところを、なんで無愛想のおれへ口を掛けたんだろう。大方高慢ちきな釣道楽で、自分の釣るところをおれに見せびらかすつもりかなんかで誘ったに違いない。そんな事で見せびらかされるおれじゃない。鮒の二匹や三匹釣ったって、びくともするもんか。おれだって人間だ、いくら下手だって糸さえ卸しや、何かかかるだろう、ここでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌いだから行かないんじゃないと邪推するに相違ない。おれはこう考えたから、行きましようかと答えた。それから、学校をしまつて、一応うちへ帰つて、支度を整えて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて浜へ行つた。船頭は一人で、船は

ここいらがいいだろうと船頭は船をとめて、錨を卸した。幾尋あるかねと赤シャツが聞くと、六尋ぐらいだと云う。六尋ぐらいじゃ鯛はむずかしいなど、赤シャツは糸を海へなげ込んだ。大將鯛を釣る気と見える、豪胆なものだ。野だは、なに教頭のお手際じゃかかりますよ。それになぎですからとお世辞を云いながら、これも糸を繰り出して投げ入れる。何だか先に錘のような鉛がぶら下がってるだけだ。浮がない。浮がなくて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかるようなものだ。おれには到底出来ないと見ていると、さあ君もやりたまえ糸はありますかと聞く。糸はあまるほどあるが、浮がありませんと云ったら、浮がなくっちゃ釣が出来ないのは素人ですよ。こうしてね、糸が水底へついた時分に、船縁の所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。――そらきた、と先生急に糸をたぐり始めるから、何かかかったと思ったら何にもかからない、餌がなくなってたばかりだ。いい気味だ。教頭、残念な事をしましたね、今のはたしかに大ものに違いなかったんですが、どうも教頭のお手際でさえ逃げられちゃ、今日は油断ができませんよ。しかし逃げられても何です。ね。浮と睨めくらをしている連中よりはましですね。ちょうど歯どめがなくっちゃ自転車へ乗れないのと同程度ですからねと野だは妙な事ばかり喋舌る。よっぽど撲りつけてやろうかと思った。おれだって人間だ、教頭ひとりで借り切った海じゃあるまいし。広い所だ。鯉の一匹ぐらい義理にだって、かかってくれるだろうと、どぼんと錘と糸を抛り込んでいい加減に指の先であやつっていた。

しばらくすると、何だかぴくぴくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくっちゃ、こうぴくつくわけがない。しめた、釣れたとぐいぐい手繰り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐るべしだと野だがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸いておらん。船縁から覗いてみたら、金魚のような縞のある魚が糸にくっついて、右左へ濺いながら、手に応じて浮き上がってくる。面白い。水際から上げるとき、ぽちゃりと跳ねたから、おれの顔は潮水だらけになった。ようやくつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕まえた手はぬるぬるする。大いに気味がわるい。面倒だから糸を振って胴の間へ擲きつけたら、すぐ死んでしまった。赤シャツと野だは驚ろいて見ている。おれは海の中で手をざぶざぶと洗って、鼻の先へあてがってみた。まだ腥臭い。もう懲り懲りだ。何が釣れたって魚は握りたくない。魚も握られたくなかろう。そうそう糸を捲いてしまった。

いちばんやり てがら
一番槍はお手柄だがゴルキじゃ、と野だがまた生意気を云うと、ゴルキと云うと露西亜の
ぶんがくしゃ な
文学者みたような名だねと赤シャツが洒落た。そうですね、まるで露西亜の文学者ですねと野
だはすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亜の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のなる木が命
の親だろう。一体この赤シャツはわるい癖だ。誰を捕まえても片仮名の唐人の名を並べたが
る。人にはそれぞれ専門があったものだ。おれのような数学の教師にゴルキだか車力だか
見当がつくものか、少しは遠慮するがいい。云うならフランクリンの自伝だとかプッシン
グ、ツー、ゼ、フロントだとか、おれでも知ってる名を使うがいい。赤シャツは時々
ていこくぶんがく まっか ざっし がっこう も き ありがた よ やまあらし き
帝国文学とかいう真赤な雑誌を学校へ持って来て難有そうに読んでいる。山嵐に聞いてみ
たら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。

あか の いっしょうけんめい つ やくいちじかん ふたり
それから赤シャツと野だは一生懸命に釣っていたが、約一時間ばかりのうちに二人で
じゅうごろうあ おか こと たい くすり
十五六上げた。可笑しい事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキばかりだ。鯛なんて薬
にしたくってもありやしない。今日は露西亜文学の大当りだと赤シャツが野だに話してい
る。あなたの手腕でゴルキなんですから、私なんぞがゴルキなのは仕方ありません。当り
前ですなと野だがかた せんどう き こごかな ほね おお
答えている。船頭に聞くとこの小魚は骨が多くって、まずくって、とても
く こやし で き
食えないんだそうだ。ただ肥料には出来るそうだ。赤シャツと野だは一生懸命に肥料を釣って
いるんだ。気の毒の至りだ。おれは一匹で懲りたから、胴の間へ仰向けになって、さっきか
らおおぞら なが つり ほう しゃれ
大空を眺めていた。釣をするよりこの方がよっぽど洒落ている。

こごえ なに はな はじ きこ
すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞えない、また聞きたくもない。おれは
そら み きよ かんが かね きれい ところ あそ き
空を見ながら清の事を考えている。金があつて、清をつれて、こんな綺麗な所へ遊びに来
たらさぞ愉快だろう。いくら景色がよくっても野だなどといっしょじゃつまらない。清は
しわくちゃ ばあ つ で は こころも
皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たって恥ずかしい心持ちはしない。野だのよ
うなのは、馬車に乗ろうが、船に乗ろうが、凌雲閣へのろうが、到底寄り付けたものじゃな
い。おれがきょうとう せじ つか
教頭で、赤シャツがおれだったら、やっぱりおれにへけつけお世辞を使って赤シ
ゃツを冷かすに違いない。江戸っ子は軽薄だと云うがなるほどこんなものが田舎巡りをして、
私は江戸っ子でげすと繰り返していたら、軽薄は江戸っ子で、江戸っ子は軽薄の事だと田舎者
が思うに極まってる。こんな事を考えていると、何だか二人がくすくす笑い出した。笑い声の
あいだ とぎ とぎ ようりょう え
間に何か云うが途切れ途切れでとんと要領を得ない。

「え？ どうだか……」 「……^{まった}全くです……^し知らないんですから……^{つみ}罪ですね」 「まさか……」 「^{ほんとう}バッタを……本当ですよ」

おれは^{ほか}外の^{ことば}言葉には^{みみ}耳を^{かたむ}傾けなかったが、^いバッタと^の云う^{ことば}野だの^き語を^{とき}聴いた時は、^{おも}思わずきつとなった。野だは何のためか^{なん}バッタと云う^{ちから}言葉だけ^いことさら^{めいりょう}力を^{うご}入れて、^き明瞭におれの^{みみ}耳にはいるようにして、そのあとを^{うご}わざと^きぼかしてしまった。おれは動かないでやはり聞いていた。

「また^{れい}例の^{ほった}堀田が……」 「^しそうかも^{てんぶら}知れない……」 「^{せんどう}天麩羅……ハハハハハ」 「……煽動して……」 「^{だんご}団子も？」

言葉はかように^{とき}途切れ^{とき}途切れであるけれども、^おバッタだの^{はな}天麩羅だの、^{そうい}団子だのというところをもって^{はな}推し^{はな}測ってみると、^お何でも^おおれの^{こと}ことについて^{はな}内所^{はな}話しをして^{はな}いるに^{はな}相違ない。話すなら^おもっと^お大きな^お声で^お話すが^おいい、また^お内所^お話を^おする^おくらいなら、^おおれ^おなんか^お誘わ^おなければ^おいい。い^おけ^お好かない^お連^お中^おだ。^おバッタ^おだろうが^お雪踏^おだろうが、^お非^おはおれ^おにある^お事^おじゃない。^お校^お長^おが^おひと^おまず^おあ^おず^おけ^おろ^おと^お云^おった^おから、^お狸^おの^お顔^おに^おめん^おじて^おた^おだ^お今^おの^おところ^おは^お控^おえている^おんだ。^お野^おだの^お癖^おに^おいら^おぬ^お批^お評^おを^おし^おや^おがる。^お毛^お筆^おでも^おし^おや^おぶ^おつ^おて^お引^おつ^お込^おんで^おる^おが^おいい。^おおれ^おの^お事^おは、^お遅^おかれ^お早^おかれ、^おおれ^お一^お人^おで^お片^お付^おけて^おみ^おせ^おる^おから、^お差^お支^おえ^おは^おない^おが、^おまた^お例^おの^お堀^お田^おが^おと^おか^お煽^お動^おして^おと^おか^お云^おう^お文^お句^おが^お気^おに^おか^おかる。^お堀^お田^おが^おおれ^おを^お煽^お動^おして^お騒^お動^おを^お大^おき^おく^おし^おた^おと^お云^おう^お意^お味^おな^おの^おか、^おある^おいは^お堀^お田^おが^お生^お徒^おを^お煽^お動^おして^おおれ^おを^おい^おじ^おめ^おた^おと^お云^おう^おの^おか^お方^お角^おが^おわ^おか^おら^おない。^お青^お空^おを^お見^おて^おい^おると、^お日^おの^お光^おが^おだ^おん^おだ^おん^お弱^おつ^おて^お来^おて、^お少^おし^おは^おひ^おや^おり^おと^おす^おる^お風^おが^お吹^おき^お出^おし^おた。^お線^お香^おの^お烟^おの^およ^おう^おな^お雲^おが、^お透^おき^お徹^おる^お底^おの^お上^おを^お静^おか^おに^お伸^おし^おて^お行^おつ^おた^おと^お思^おつ^おたら、^おい^おつ^おし^おか^お底^おの^お奥^おに^お流^おれ^お込^おんで、^おう^おす^おく^おも^おや^おを^お掛^おけ^おた^およ^おう^おにな^おつ^おた。

もう^お帰^おろ^おう^おか^おと^お赤^おシ^おャ^おツ^おが^お思^おい^お出^おし^おた^およ^おう^おに^お云^おう^おと、^おえ^おえ^おち^おょう^おど^お時^お分^おで^おす^おね。^お今^お夜^おは^おマ^おド^おン^おナ^おの^お君^おに^おお^お逢^おい^おで^おす^おか^おと^お野^おだ^おが^お云^おう。^お赤^おシ^おャ^おツ^おは^お馬^お鹿^おあ^お云^おつ^おち^おや^おい^おけ^おない、^お間^お違^おい^おに^おな^おると、^お船^お縁^おに^お身^おを^お倚^おた^おし^おた^お奴^おを、^お少^おし^お起^おき^お直^おる。^おエ^おへ^おへ^おへ^お大^お丈^お夫^おで^おす^およ。^お聞^おいた^おつ^おて……と^お野^おだ^おが^お振^おり^お返^おつ^おた^お時^お、^おおれ^おは^お皿^おの^およ^おう^おな^お眼^おを^お野^おだ^おの^お頭^おの^お上^おへ^おま^おと^おも^おに^お浴^おび^おせ^お掛^おけ^おて^おや^おつ^おた。^お野^おだ^おは^おま^おぼ^おし^おそ^おう^おに^お引^おつ^お繰^おり^お返^おつ^おて、^おや、^おこ^おい^おつ^おは^お降^お参^おだ^おと^お首^おを^お縮^おめ^おて、^お頭^おを^お搔^おいた。^お何^おと^おい^おう^お猪^お口^お才^おだ^おら^おう。

ふね しず うみ きし こ もど つり す み 船は静かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞か
ら、ええ寝ていて空を見る方がいいですと答えて、吸いかけた巻烟草を海の中へたたき込んだ
ら、ジュと音がして艀の足で掻き分けられた浪の上を揺られながら 濼 っていた。「君が来
たんで生徒も大いに喜んでるから、奮発してやってくれたまえ」と今度は釣にはまるで
縁故もない事を言い出した。「あんまり喜んでもないでしょう」「いえ、お世辞じゃない。
まったく喜んでるんです、ね、吉川君」「喜んでるどころじゃない。大騒ぎです」と野だはに
やにやと笑った。こいつの云う事は一々癩に障るから 妙 だ。「しかし君注意しないと、
陰呑ですよ」と赤シャツが云うから「どうせ陰呑です。こうなりや陰呑は覚悟です」と云って
やった。実際おれは免職になるか、寄宿生をことごとくあやまらせるか、どっちか一つに
する 了 見 でいた。「そう云っちゃ、取りつきどころもないが——実は僕も 教頭として君の
ためを思うから云うんだが、わるく取っちゃ困る」「教頭は全く君に好意を持ってるん
ですよ。僕も及ばずながら、同じ江戸っ子だから、なるべく長くご在校を願って、お互いに力
なろうと思って、これでも蔭ながら 尽力 しているんですよ」と野だが人間並の事を云った。
野だのお世話になるくらいなら首を縊って死んじまわあ。

「それでね、生徒は君の来たのを大変歓迎しているんだが、そこにはいろいろな事情があ
つてね。君も腹の立つ事もあるだろうが、ここが我慢だと思って、辛防してくれたまえ。決
して君のためにならないような事はしないから」

「いろいろの事情た、どんな事情です」

「それが少し込み入ってるんだが、まあだんだん分りますよ。僕が話さないでも自然と分
て来るです、ね吉川君」

「ええなかなか込み入ってますからね。一朝一夕にや到底分りません。しかしだんだん分
ります、僕が話さないでも自然と分って来るです」と野だは赤シャツと同じような事を云う。

「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから 伺 うん
です」

「そりゃごもつともだ。こっちで口を切って、あとをつけないのは無責任ですね。それじゃこ
れだけの事を云っておきましょう。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師

は始めての、経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、そう書生流に淡泊には行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏しいと云うんですがね……」

「どうせ経験には乏しいはずです。履歴書にもかいとききましたが二十三年四ヶ月ですから」

「さ、そこで思わぬ辺から乗ぜられる事があるんです」

「正直にしていれば誰が乗じたって怖くはないです」

「無論怖くはない、怖くはないが、乗ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、気を付けないといけないと云うんです」

野だが大人しくなったなと気が付いて、ふり向いて見ると、いつしか艦の方で船頭と釣の話をしている。野だが居ないんでよっぽど話しよくなった。

「僕の前任者が、誰れに乗ぜられたんです」

「だれと指すと、その人の名誉に関係するから云えない。また判然と証拠のない事だから云うとこっちの落度になる。とにかく、せつかく君が来たもんだから、ここで失敗しちや僕等も君を呼んだ甲斐がない。どうか気を付けてくれたまえ」

「気を付けろったって、これより気の付けようはありません。わるい事をしなけりゃ好いんでしょう」

赤シャツはホホホと笑った。別段おれは笑われるような事を云った覚えはない。今日ただ今に至るまでこれでいいと堅く信じている。考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに正直な純粋な人を見ると、坊っちゃんだの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する。それじゃ小学校や中学校で嘘をつくな、正直にしろと倫理の先生が教えない方がいい。いっそ思い切って学校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策を教授する

方が、世のためにも当人のためにもなるだろう。赤シャツがホホホホと笑ったのは、おれの
単純たんじゆんなのを笑ったのだ。単純しんそつや真率まそつが笑われる世の中よなかじゃ仕様しようがない。清きよはこんな時ときに決けつ
して笑った事はない。大おおいに感心かんしんして聞いたもんだ。清の方が赤シャツよりよっぽど上じやうとう等
だ。

「無論むろん悪い事わるいことをしなければ好いいんですが、自分じぶんだけ悪い事わるいことをしなくっても、人の悪いひといの
が分わからなくっちゃ、やっぱりひどい目めに逢あうでしょう。世の中よなかには磊落らいらくなように見みえても、
淡泊たんぱくなように見みえても、親切しんせつに下宿げしゆくの世話せわなんかしてくれても、めったに油断ゆだんの出来できないの
がありますから……。大分だいぶん寒さむくなった。もう秋あきですね、浜はまの方は靄ぼうでセピヤ色もやいろになった。い
い景色けしきだ。おい、吉川君よしかわくんどうだい、あの浜おおの景色こえは……」と大きな声こえを出だして野だのを呼よん
だ。なあるほどこりや奇絶きぜつですね。時間じかんがあると写生しゃせいするんだが、惜おしいですね、このままに
しておくのはと野だおおは大おいにたたく。

みなとや にかい あかり ひと
港屋みなとやの二階にかいに灯あかりが一つついて、汽車ひとの笛きしやがフューふえと鳴なるとき、おれの乗のっていた舟ふねは磯いその
砂すなへざぐりと、舳へさきをつき込んで動こかなくなった。お早はようお帰かえりと、かみさんが、浜たに立たって
赤あかシャツあいきつに挨拶あいさつする。おれは船端ふなばたから、やっかけと掛声ごえをして磯いそへ飛とび下おりた。